

(別紙様式 = 小学校用)

都道府県番号	3
都道府県名	岩手県

学校名及び規模(平成15年4月現在)

学校名	水沢市立水沢小学校								教員数
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	37
学級数	4	4	4	4	4	4	2	26	
児童数	149	146	141	150	144	152	6	888	

研究の概要

1 研究主題

「自ら学ぶ力を育てる学習指導 確かな学びを育む指導の工夫を通して」

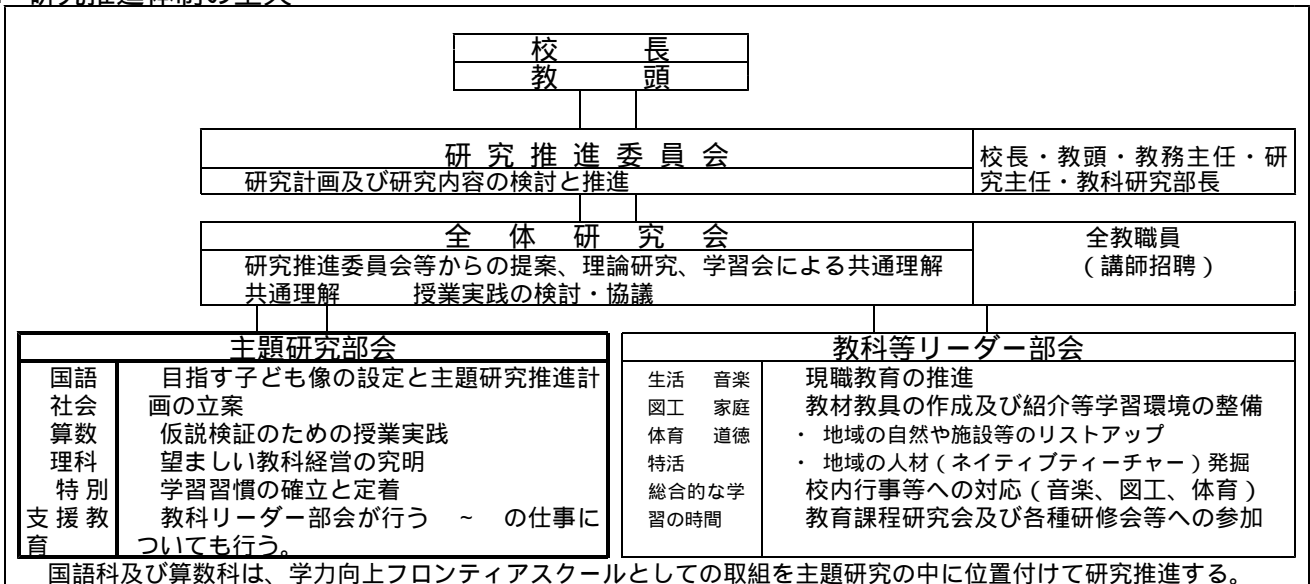
2 研究主題設定の趣旨

- (1) 教育の今日的課題から
国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題への関心の高まり、高齢化・少子化など様々な面で大きく社会が変化しており、これからの学校教育においては、ゆとりの中で生きる力の育成及び自己を確立し、主体的に生きていくことができる資質や能力を育てることが求められている。そのためには、自ら学び自ら考える力の育成を重視した教育を行うことが必要であると考え。
- (2) 学校教育目標の具現化から
本校の学校教育目標は、自ら学ぶ子ども 心豊かな子ども 根気よい子ども 健康な子どもである。この中の「自ら学ぶ子ども」については、主として各教科及び領域等の学習指導を通して達成できるものとする。
- (3) 児童の実態から
与えられた課題について自分なりの考えをもって真面目に取り組んだり、練習問題などに対して根気強く取り組んだりする児童が多いが、次のような点においては、まだ不十分である。

問題の中から課題を設定していくこと 自分の言葉でしっかりと表現すること 自分の考えをもち友だちとかわり合いながら学び合うこと 学習したことを他の学習に生かし自分で学習を進めていくこと

研究の概要

1 研究推進体制の工夫



2 研究の実際

- (1) 国語科及び算数科を中心にした自ら学ぶ力の育成 確かな学びを育む指導の工夫を通して

【国語科における取組】(授業の質的改善)

ア 叙述に即した正しい読み取りの力を身に付けさせる学習指導(「読むこと」の力を育成する言語活動の設定)

昨年度の CRT において、全国得点率は上回ってはいるものの「読むこと」の領域で、定着度が十分ではない実態が見られた。そこで、「読むこと」の力を育成するための言語活動を意図的に設定し各学年で実施することとした。

一人学びにおける言語活動(音読・視写・サイドライン引き・書き込み)を中心とした学習指導過程に基づいた授業の展開

実践例 1

単元名「大事なところに気を付けて読もう『サンゴの海の生きものたち』(第2学年・説明文)

授業記録(抜粋)	手立てについて
T: ホンソメワケベラの体について書いてあるところに気を付けて読みましょう。(一斉音読)(1) T: そこに線を引きましょう。(2) T: ホンソメワケベラの体の色は、何色ですか。C: 明るい青色です。 T: どんな模様をしていますか。C: 黒いすじです。 T: 体の長さは、どれくらいですか。C: 12センチほどです。(中略) T: ホンソメワケベラが大きな魚に食べられないわけについて書いてあるところを見つけてワークシートに視写しましょう。(3) T: ホンソメワケベラは、大きな魚のどの部分をそうじしていますか。C: 体です。C: 口の中です。 T: 体や口の中の何をそうじしているのですか。C: 体や口の中の虫です。 T: どのようにして取っているのか想像してみましょう。(中略) T: ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いについて分かったことを書きましょう。(4) C: 大きな魚は、ホンソメワケベラにそうじしてもらっています。 C: ホンソメワケベラが大きな魚の口の中の虫をとるため、口の中に入るのを見てびっくりしました。でも、食べられることはないのでホンソメワケベラと大きな魚は、互いに役に立っていることが分かりました。 C: ホンソメワケベラと大きな魚は、互いに助け合って、かかわり合っています。	(1) 学習課題解決のための「読みの視点」をもって音読する言語活動……語句を大切に読んでいく構えを作る。 (2) ホンソメワケベラの体について正しく読み取るために読みの視点にそってサイドラインを引く言語活動 (3) 学習課題の解決のための中心文を視写する言語活動 (4) 学び合いで読み取ったことをもとに学習課題に対する自分の読み取りをまとめる言語活動……自分の考えを自分の言葉で表現できることを目指す。

このような言語活動を行う際に、個に応じた指導の工夫として、次のような利点を考えてワークシートの活用(低学年を中心に)やノート作り指導(高学年を中心に)を行っている。

児童一人一人が確実に学習に参加できる。 教師は、児童が作業中、机間指導を行い、個に応じた支援を行うことができる。 教師が、児童一人一人の読むことの力について把握できる。 児童が学習方法を身に付けることができる。

《成果》

常に本文に立ち返り語句を大切に読んだ授業を行うことで、場面や様子について想像を広げたり豊かにしたりして自分の読み取りができる児童が増えてきた。

単元指導後のテストから、「読み取り」の力について次のような結果(正答率)が得られた。

- ・ 話題の中心が分かること(94%)
- ・ 要点が分かること《キーワードを抜き出すこと》(94%)
- ・ 要点が分かること《キーセンテンスを抜き出すこと》(90%)
- ・ 理由についてまとめること(94%)
- ・ 要旨が分かること(97%)

「国語の学習に関するアンケート(抜粋)」結果から、児童の学習への意欲や有用感が向上したことが分かる。

- ・ 国語の授業が好きか。(事前91% 事後95%)
- ・ 課題について考えるとき最後までがんばろうと努力しているか。(事前88% 事後95%)
- ・ 「楽しい」「よくがんばった」と感じることもあるか。(事前86% 事後89%)
- ・ 授業が分かりやすいか。(事前83% 事後92%)
- ・ 学習をして「よかったなあ。役に立ったなあ。」と思うことがあるか。(事前58% 事後81%)

イ 自分の学習を振り返り、次の課題へのステップとなるような評価活動(自己評価活動を中心に)

「学習計画・評価表(振り返りカード)」の作成と活用

児童に次の学習への意欲をもたせていくためには、児童が自分自身の学習活動を振り返り、一人一人が自分のよさや課題に気付くとともに、そのことを通して次の課題を自分なりに設定しようとする場の設定が大切である。そこで、児童が自分を理解し、自分を評価する活動の必要性から「学習計画・評価表」の作成と活用を行った。なお、形式については、各学年の発達段階に応じたものとした。

【「学習計画・評価表」の作成の視点】

- 1 年間指導計画に基づいて作成された単元指導における「指導・評価計画」を基に、単元の学習計画、自己評価項目を設定する。
- 2 単元指導の初めに「学習計画・評価表」を示しながら、単元の学習目標や学習内容を児童に知らせ、単元の学習の見通しをもたせる。
- 3 児童は、評定法(ABCDの4肢とする)と自由記述の2つの方法により1単位時間毎の学習を自己評価したものを記録していく。自由記述欄には、「分かったこと、できるようになったこと、がんばったこと、もっと知りたいこと」等について自由に記述できるようにする。

【「学習計画・評価表」の活用の仕方】

- ・ 教師は、自由記述の様子から、児童が本時の授業で理解できたことや発見したこと、工夫したこと、疑問等を把握する。
- ・ 児童の自己評価に対し教師がコメントを入れる。よさをほめ、つまずきに対しては簡単なアドバイスをする。
- ・ 授業ではできなかった一人一人に対する支援を行う。

【算数科における取組】(指導形態の工夫・改善)

レディネステスト、事前テストの結果を生かし、個に応じた指導・支援のための学年発達段階を考慮した指導形態の在り方について下の表のような形を基本として指導を進めている。また、事後テストを実施しその結果を考察し指導・支援に役立てるようにしている。

〔個に応じた指導のための学年発達段階を考慮した指導形態の在り方〕

	指導形態	指導のねらい及び留意点
低学年	小集団加配による TT指導 興味・関心に応じたコース別 に基づいた指導(実態に応じて)	ねらい：学習集団に馴染み、一斉指導形態に対応できる児童を育成すること 留意点：学級で一斉に指導を受けることに課題をもつ児童に対応して指導を行う。(TT指導におけるT2は、主に支援を必要とする児童に対して個別指導を行う。)
高学年	少人数加配による 少人数指導 興味・関心に応じた選択コース別学習に基づいた指導 習熟度に応じた選択コース別学習に基づいた指導	ねらい：一斉指導形態においても個性を發揮し学習能力を伸ばすことのできる児童を育成すること 留意点：教材の特性や児童の実態に応じて次のような指導形態を取り入れる。 選択コース別学習 習熟度別学習 基礎・基本コース(だんだんコース) 発展コース(どんだんコース)

ア 基礎・基本の確実な定着を図る少人数指導、習熟度に応じた選択コース別学習に基づいた指導
実践例2

〔単元名〕「三角形と角」(第4学年):《単元の指導の概要》
興味・関心をもたせる授業(単元の導入において)
単元の導入であるため、児童の興味・関心をもたせ多様な考えを引き出すため1C2TによるTT指導の形態とし、グループ学習を行った。意欲的に取り組む児童が多く、多様な考えの中からより価値の高いものに気付いていく様子が見られた。
それぞれのコースにおける課題解決場面の工夫(単元の「とらえる」段階において)
ねらいは、二等辺三角形や正三角形の角の性質を理解するというねらいのもと、「どんだんコース」では、一人学びの時間を十分保障し、とも学びの発表の場で全体のものへと高めた。また、「だんだんコース」では、教師主導による学習形態で、角の性質についてより確かな定着を図った。
適用力をつけ、学ぶ楽しさを味わわせる授業(単元の適用場面において)
小単元「二等辺三角形と正三角形」「三角形とまどめ」の時間にこれまで学んだことの定着を図るとともに、学んだことを生かすことのできる適用力を養いたいと考え、「どんだんコース」「だんだんコース」においてそれぞれ3つの選択コースを準備し児童に選択させ、取り組ませた。

《成果》

レディネステストの結果を基に習熟度に応じたコースを設定したことで、基礎・基本の定着を図ることができた。また、「ひろげる」の段階においては適用力を伸ばすため、児童の興味・関心に応じたコースをさらに設定した。

単元指導後のテストから、次のような結果(正答率)が得られた。

- ・ 二等辺三角形の性質の理解(95%)
- ・ 正三角形の性質の理解(95%)
- ・ 対頂角の性質の理解(85%)
- ・ 回転角の理解(72%)

学習後のアンケートでは、習熟度別学習については「自分のペースに合わせて勉強できるので分かりやすいし、やる気が出る・発表できるようになった・たくさん問題が解けた・間違えても先生が詳しく教えてくれる」などの感想が見られ、児童に学習に対する成就感をもたせることができた。

(2)(1)を支える内容について

ア 各教科における基礎的・基本的な指導内容の見直し

本校では、授業で目指す基礎・基本を確実に身に付けさせることが、確かな力を高めることになると考え、学習指導要領の指導内容を基礎・基本ととらえて今年度は国語科及び算数科において各学年毎に学習指導要領の指導事項を洗い出して整理した。それをもとに指導を行い、「教科書を教える授業」から「教科書で教える授業」への転換を図ることを目指した。

イ 評価規準表の活用と見直し

基礎・基本の定着を確実なものにするためには、より具体的な評価規準によって児童の実態を把握し支援することが大事であるという考えで、単位時間毎の評価規準を設定し、指導を進めている。評価規準表は、各教科における実践を積み重ねながら改善を図っている。

また、一単元全体を通して、児童の変容を見取るという考えに基づいた指導と評価を進めるため、評価補助簿1(一覧表)を作成した。授業場面における評価については評価補助簿2(座席表)を活用し、評価補助簿1に転記した。評価補助簿1にはペーパーテストの結果や児童の様子を具体的に記入するようにし、次の指導に生かすようにしたり、学期末の評価にもつなげることができるようになっていた。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

ア 国語科において、一人学びにおける言語活動を位置付けた授業実践を積み重ねることにより、児童一人一人に確かな力を付けるための学習指導過程(「読むこと」の指導)を明らかにすることができた。

イ 算数科において、学年の発達段階を考慮した指導形態について明らかにしたことにより、児童一人一人にきめ細かな指導を行うことができるようになった。

ウ 児童一人一人の学習内容の定着度を把握すること及び各教科ごとの「単元別指導事項表」に基づいて教師が基礎的・基本的な内容をしっかりととらえて指導と評価を進めることにより、指導の重点化や単元を見通した評価活動を行うことができた。そのことにより、学習活動の場を意図的・計画的に設定することができるようになり、児童の学習への意欲の向上や自ら考え学ぼうとする様子が見られるようになった。また、教師は、繰り返し指導することや児童一人一人の学習の様子を丁寧に見取ることができるようになった。以上のことが確かな学びを育むことにつながっている。

(2) 課題

ア 各教科の指導と評価に生かすことのできるレディネステスト、事前・事後テストの吟味を行うこと

イ 習熟段階における学年の系統性を考慮した定着問題の作成を行い、その活用を図ること

ウ 学校から保護者や地域に対して積極的に情報を発信し取組についての理解を確かなものにしていくこと

4 研究成果の普及の方策

- (1) 学校推進会議の開催(今年度学校推進委員.....本校 PTA 副会長)
学校推進委員の参加による校内研究会を開催し、感想・意見等をいただき研究推進に生かすようにした。
ア 第1回推進会議(8月20日.....研究経過報告会)
イ 第2回推進会議(10月1日.....授業研究会 2学年国語「大事なところに気を付けて」)
ウ 第3回推進会議(11月18日.....授業研究会 6学年算数「比」)
エ 第4回推進会議(1月16日.....今年度の成果と課題)
(2) 水沢教育事務所管内学力向上フロンティアスクール研究推進会議(12月9日)
(3) 岩手県学力向上フロンティアスクール研究推進会議(1月14日)

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

【特色ある取組事例として紹介したいこと】

言語活動を位置付けた授業実践の継続

- ・ 確かな力を高める学習指導過程を明らかにし、共通理解による実践を展開している。
- 学年発達段階を考慮した指導形態の工夫
- ・ 児童一人一人により一層きめ細かな指導を実践している。
- 学習内容の定着度の把握及び単元別指導事項の活用による指導
- ・ 単元における基礎・基本を明確にし、指導内容の重点化を図った指導を日々実践している。
- 自ら学ぼうとする学習活動の場における意図的・計画的な設定
- ・ 学習意欲が向上し、確かな学びの育成につながる実践を展開している。